第十一章　朱雀院の物語　五十賀の延引

［第一段　女二の宮、院の五十の賀を祝う］

かくて、*山の帝の御賀も延びて、秋とありしを、八月は*大将の御忌月にて、楽所のこと行なひたまはむに、便なかるべし（こうしたことで殿主催の朱雀院五十賀も延期されて秋に予定されていたが、八月は近衛大将源君の母御忌月なので、近衛府の楽人たちが演奏するのは祝賀に障ると都合が悪いのでした）。　*「やまのみかど」は、入山あそばした院の帝、ということで＜朱雀院＞を言うらしい。若菜上巻六章九段に「院の帝は、月のうちに御寺に移ろひたまひぬ」とあり、「月のうち」とは同一段に「かくて、如月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ」とあった同月のことで、今から七年前の二月のこと。その「御寺」が立派に整備されたのか、別に御所を作ったのかは不明だが、「山の帝」という言い方には御所の整備も推測される。注には＜朱雀院の五十賀。「山の帝」の呼称は初見。源氏主催の御賀は、最初、二月二十余日の予定だったが、紫の上の発病によって延期になっていた。『集成』は、女三の宮主催の御賀という。源氏主催といっても、女三の宮の夫としての主催である。＞とある。　*「だいしゃうのおんきづき」は＜夕霧大将の母葵の上は八月に逝去。賀宴には近衛府の楽人が演奏するので、その長官である夕霧が取り仕切るのは不都合だという。＞と注にある。ただ、源君はこの年で 26 歳であり、即ち葵の上逝去も 25 年前ということになる。私などはいつまでも故人に拘ることの方が不便に感じるが、伝統と格式が身分社会の拠って立つところなら、大事なことなのかも知れない。

九月は、*院の大后の崩れたまひにし月なれば、十月にと思しまうくるを、*姫宮いたく悩みたまへば、また延びぬ（九月は弘徽殿大后の御忌月なので、御祝賀は冬の十月にと準備されていたが、姫宮がとても御体調にお苦しみなので、また延びました）。　*「ゐんのおほきさき」は＜弘徽殿大后＞とのこと。　*「姫宮」は＜妊娠七ヶ月＞とのこと。さすがに、傍目にも懐妊がはっきりと知られただろう。

*衛門督の御預かりの宮なむ（衛門督が頂き申した女二の宮は）、*その月には参りたまひける（その十月に朱雀院の山の御所に父院の五十賀を祝いに参上なさったのです）。　*「衛門督の御預かりの宮」は注に＜朱雀院の女二の宮、通称、落葉宮。「御預かりの宮」という呼称表現が注目される。『集成』は「衛門督が、正室としてお世話申し上げている女二の宮」。『完訳』は「衛門督がお迎えしている女二の宮が」と訳す。＞とある。「あづかり」は「預かる（公務を委任される）」ではなく「与る（授かる、頂く）」の連用名詞だろう。　*「その月には参りたまひける」は＜十月に、朱雀院の御所に御賀に参上した、という意。＞と注にある。多分そういう文意なのだろうとは読めるが、頭初話題にした「山の帝の御賀」は＜源氏殿主催の朱雀院五十賀＞という意味なのだろうから、この「参りたまひける」は別の「自らの御賀」な訳で、そういう明示は現代語では必須だ。

*太政大臣居立ちて（宮の舅である太政大臣藤原殿が取り仕切って）、いかめしくこまかに（盛大且つ物資豊富で豪勢に）、もののきよら（飾り付けや装束の美しさ）、儀式を尽くしたまへりけり（式次第の格式の高さを尽くしてお祝い申しなさいました）。　*「おほきおとど」は藤原殿に違いないが、二章一段に「太政大臣、致仕の表たてまつりて、籠もりゐたまひぬ」とあって、公務は辞していたもの、地位としての太政大臣の報奨は受けていたようだ。藤君の父君であり、女二の宮から見て与謝野訳文にあるように＜舅＞に当たる。右家筋の朱雀院と源氏殿との仲を上手く取り持ったとも、源氏殿を切り札にして上手く立ち回ったとも、見方はそれぞれ有りそうだが、人付き合いに長けた政治家ではありそうで、成功者ではあるものの、その器用さが災いしてか、肝心の娘の中宮位や藤君の本懐などは適えさせてやれなかった。それでも深刻に落ち込んではいなさそうな所が、如何にも藤氏長者らしい。

督の君も(藤君も)、そのついでにぞ(この際だからと)、思ひ起こして出でたまひける(気を取り直してお出掛けなさいました)。なほ(しかしその後はやはり)、悩ましく(不調で)、例ならず病づきてのみ過ぐしたまふ(元気なく病気がちにお過ごしなさいます)。

*宮も(女三の宮も)、うちはへてものをつつましく(引き続いて気が引けて)、いとほしとのみ思し嘆くけにやあらむ(妊娠を困ったこととばかりに御思いで気落ちしていらした所為か)、月多く重なりたまふままに(孕み月が進んで身重になりなさるほどに)、いと苦しげにおはしませば(とても苦しそうにしていらっしゃるので)、院は、心憂しと思ひきこえたまふ方こそあれ(殿は密通での宮の妊娠を不快なことと思う一方で)、いとらうたげにあえかなるさまして、かく悩みわたりたまふを(なんとも幼げに弱弱しくこう苦しみ続けていらっしゃるのを)、いかにおはせむと嘆かしくて(どうお成りかと心配で)、さまざまに思し嘆く(いろいろ思い悩みなさいます)。御祈りなど(御祈祷については)、今年は*紛れ多くて過ぐしたまふ(今年は紫の上と姫宮との平癒祈願が重なった煩雑さ多く過ごしなさいます)。　*「宮」は女三の宮のことらしい。紛らわしい。　*「紛れ多し」は＜紫の上、女三の宮の病気平癒のための御祈祷。何かととりこみ事が多い、という意。＞と注にある。

［第二段　朱雀院、女三の宮へ手紙］

*御山にも聞こし召して(入山あそばした朱雀院も宮の御懐妊をお聞きあそばして)、らうたく恋しと思ひきこえたまふ(可愛く会いたいと思い申しなさいます)。　*「御山」は「みやま」と読みがある。朱雀院を言う、らしい。「聞こし召して」は上文の「宮も～いとらうたげにあえかなるさまして、かく悩みわたりたまふ」を受けていて、その限りでは＜宮の長の御変調をお聞きあそばして＞ということに見えるが、注にはこの文意を＜朱雀院が女三の宮懐妊の事をお聞きになって、の意。＞とある。宮の御変調は五月から見られたようだが、四月の密通で懐妊したとして、その変調が懐妊と周知されるのは腹太になってからだろうから、いよいよこの十月の七ヶ月目になってからそれと知られた、ということらしい。つまり、「らうたく恋しと思ひきこえたまふ」が＜御懐妊が周知されたことの明示＞を意味するようだ。であれば、結構重要な文だ。また、この時点では「らうたく恋し」いのは宮であり、まだ生まれていない御子ではないのだろう。

月ごろかくほかほかにて(紫の上が回復を見たあとも、何ヶ月も別居が続いて)、渡りたまふこともをさをさなきやうに(殿が宮をお訪ねなさる事が滅多に無いように)、*人の奏しければ(女房たちが奏上いたしたので)、*いかなるにかと御胸つぶれて(朱雀院は何か不祥事が有ったのかと心痛し)、世の中も今さらに恨めしく思して(世俗の男女関係の煩わしさを今さらに難儀にお思いになって)、　*「人の奏しければ」について、注には＜源氏は紫の上の病気もほぼ平癒したにもかかわらず、六条院にはほとんどもどらず、二条院にとどまったままでいる。＞と事情説明がある。紫上は一月二十日過ぎの女楽直後に発病し、回復の無いまま三月初めに二条院に転養した。で、四月十日過ぎの御禊前日に密通が有り、それ以来宮が寝込み、その数日後の葵祭り当日には宮の不調を案じて殿が久しぶりに六条院に戻っていたが、その翌日未明に因縁深くも車争いを怨んだ御息所の死霊が紫上を一時的ではあっても絶命させるに至り、急ぎ帰った源氏殿の必死の除霊で上は一命を取り戻し、それでも五月中は勝れなかったが、六月になって小康を得た。そこで殿は、変調を訴える宮の見舞いに六条院に戻るも、其処で藤君の手紙を発見し、宮の不義を知る、という経緯だ。ということは、「月ごろかくほかほかにて」は＜紫上が回復した六月以降でも何ヶ月も別居が続いて＞という文意になりそうだ。殿が二条院に移ったのは三月だから、別居自体は八ヶ月に及んでいるが、確かに六月以降の別居は殿自身に於いては当然に、また傍目にも、意味が違って見えたのだろう。　*「いかなるにか」について、先読みは不本意ながら、下

文に＜朱雀院は、源氏殿が紫の上の看病で二条院に行っていた隙に、六条院の宮に密通があったのではないか、と懸念していた＞事が記されていて、別居下の不義が有り勝ちだった当時の貴家事情が窺える。そういう一般認識があったことと、だからこそ不始末の無いように管理者は注意が必要だった、というのが当時の読者たる宮廷女房の読み方だったのかも知れない。

「*対の方のわづらひけるころは(対の方が病気だった時には)、なほその扱ひに(やはり殿は二条院で看病に、当たりなさっていらっしゃる)」と聞こし召してだに(とお聞きになっても)、なまやすからざりしを(朱雀院は殿が宮と別居することに心穏やかならずだったが)、そののち(対の方が回復した後にも)、直りがたくものしたまふらむは(源氏殿がその別居を変えずにいらっしゃるのは)、　*「対の方」は朱雀院目線での＜紫の上＞を指す言い方らしい。注には＜以下「聞こゆかし」まで、朱雀院の心中。途中に語り手の朱雀院に対する敬意が混入する。『集成』は「以下、朱雀院の心中」「「聞こしめしてだに」は、語り手の敬意の表れたものと見る」と注す。＞とある。『集成』の指摘に従って、私なりに括弧校訂を試みてみた。

「そのころほひ(その間に)、便なきことや出で来たりけむ(密通の不祥事があったのかも知れない)。みづから*知りたまふことならねど(自分から望みなさった不義密通では無くても)、良からぬ御後見どもの心にて(不心得な女房たちなどの手筈で)、いかなることかありけむ(どういう手引きが為されるか分かったものではない)。内裏わたりなどの(御所の内情に於いても)、みやびを交はすべき仲らひなどにも(高貴な社交関係で)、けしからず憂きこと言ひ出づるたぐひも聞こゆかし(いかがわしい不倫が噂に立つ例も聞くことだし)」　*「知る」は＜親しむ＞の意味もあると古語辞典にあるので、「みづから知りたまふこと」は＜自分から親しく為さったこと＞という言い方で＜不義密通＞を婉曲に言っているのだろうが、曖昧に言ったからと言って事態が曖昧に成る物でもない。ただ、父院は宮の性格を良く知っていて、自分から不義を働く積極性は無いものの、他人の手筈を拒む自立心も無い、と考えたようだ。一般的に十分有り得る不祥事だからこそ懸念したのだろうし、見事に不幸にも的中していた、というワケだ。

とさへ思し寄るも(とさえも思い巡らしなさるのも)、こまやかなること思し捨ててし世なれど(雑念を捨てて出家なさったものの)、なほ子の道は離れがたくて(やはり子を思う親の心配は離れられずに)、宮に御文*こまやかにてありけるを(宮にお手紙が労わり深い文面であったのを)、大殿、おはしますほどにて、見たまふ(源氏殿は六条院にいらっしゃっていた時だったので御覧になります)。　*「こまやか」は＜愛情こまやか＝労わり深い＞で、体調や気候変化を気遣う内容だったのだろう。「こまやか」は、場合によっては＜詳しい事情＞を言うこともあるようだが、まさか父院が宮の密通の懸念を表立って示す筈はない。上文はあくまで朱雀院の心労の描写、ということらしい。

「そのこととなくて(特に用件も無いので)、しばしばも聞こえぬほどに(しばらくお手紙も差し上げないうちに)、おぼつかなくてのみ年月の過ぐるなむ(様子が分からないまま日々を過ごしてきた事が)、*あはれなりける(悔やまれます)。*悩みたまふなるさまは(腹太く大儀でいらっしゃることは)、詳しく聞きしのち(詳しく聞いたので)、念誦のついでにも思ひやらるるは(念仏修行の時にも安産祈願を思っていますが)、いかが(お加減は如何ですか)。　*「あはれ」は＜ああ我なるに＞という感嘆詞を深い印象の感情表現の形容動詞として語用しているので、その中身は悲喜・感動・自責・同情・絶句などさまざまで、文脈で読む他は無いという一面で便利で一面で面倒な語だ。此処では、無沙汰を悔やんでいるのだろう。それというのも、朱雀院は変に気を回して、と言っても、その懸念は当たっていたのだが、気楽

に宮に手紙を出す事が出来ずにいたが、意外にも懐妊と知って、それは当然に殿の子だろうと基本的には安泰かと、実はそれは誤解なのだが、一安心して、やっと手紙を出すことが出来た、という事情のようで、密通は取り越し苦労、では実は不幸にも無かったのだが、を悔やんだ、というヤヤコシイ文、かと思う。　*「悩みたまふなるさま」は普通なら＜病気でお苦しみの様子＞ということだろうが、先に「らうたく恋しと思ひきこえたまふ」と懐妊を喜ぶ既述があったので、此処では＜妊娠で大儀になさっている近況＞という意味だ。

世の中寂しく思はずなることありとも（夫婦仲を寂しく思える事があっても）、忍び過ぐしたまへ（堪えて過ごしなさいませ）。恨めしげなるけしきなど（薄情を恨めしそうにする態度は）、*おぼろけにて（よくあることですが）、見知り顔にほのめかす（他の女への心変わりを事情を知ったような顔で男をたしなめようとするのは）、いと品おくれたるわざになむ（とても下品なものですから）」　*「おぼろけ」は何度もノートしている。が、此処でも語感がつかめない。訳文では「おぼろけにて」を＜不確かなままに＞としてあるようだが、私は＜一般的なことで＞くらいに取って置く。

など、教へきこえたまへり（などとお諭し申していらっしゃいました）。

いといとほしく心苦しく（本当に遺憾で心苦しく）、「*かかるうちうちのあさましきをば（こうした内情の不始末を）、聞こし召すべきにはあらで（ご存知無しに）、*わがおこたりに（わたしの薄情さを）、本意なくのみ聞き思すらむことを（残念なこととばかりに聞き思いなさっていらっしゃるようだ）」とばかり思し続けて（とのように殿は朱雀院の心労をお思い続けなさって）、　*「かかるうちうちのあさましき」は＜宮の密通＞。　*「わがおこたり」は源氏殿の内心文なので＜源氏殿の薄情さ＞。ということなのだろうが、当時の現代語文の所為なのだろうか、語り手の言い回しに独特の省略ないしクセのようなものを感じて、何だか分かり難い。

「この御返りをば（このお返事を）、いかが聞こえたまふ（如何お書きになりますか）。心苦しき御消息に（心苦しいお手紙で）、*まろこそいと苦しけれ（私の方がとても辛くなります）。　*「まろこそ」の強調は＜『完訳』は「私こそ、じつにつらい。不義ゆえの不快さをこめていう」と注す。＞と注にある。殿が密通を知っていることは、宮も分かっているのだから、こう言われる宮こそ相当に辛そうだ。殿の不満は尤もだし、宮の幼さは情けないし、藤君の選民意識に基づく使命感も鼻に付くし、もともと私のような末端の者が共感できる環境とは別世界の舞台で、誰一人として預託すべき利害など無い登場人物たちだが、それでも殿の貫禄の無さみたいなものは厭味に感じる。

*思はずに思ひきこゆることありとも（私があなたを心外に思い申すことがあっても）、おろかに（冷たくして）、人の見咎むばかりはあらじとこそ思ひはべれ（女房たちが変に思うことの無いようにしようと思っています）。*誰が聞こえたるにかあらむ（誰が兄院に変なことを申し上げたのでしょうか）」　*「思はず」は＜好ましく無いさま。心外である。気に入らない。＞という意味の形容動詞、と古語辞典にある。「思ひきこゆる」は話者の殿が聞き手の宮に対して＜思い申し上げる＞。　*「誰が聞こえたるにかあらむ」は源氏が宮の所へあまり寄り付かないことを、誰かが朱雀院に報告した、ことに対する不満のようだ。が、殿自身が基本的な生活は相変わらず二条院でしているのだから、誰が、と言うより現に殿は宮に対して距離を置いている。宮の体調を気遣うかの上辺の労わりは手厚くしているらしいが、基本的な生活態度が紫の上寄りなのは誰の目にも明らかだった筈だ。実際、それが殿の心情でもあるのだし。

とのたまふに(と殿が仰ると)、恥ぢらひて背きたまへる御姿も(恥らって顔を背け為さる宮の御姿は)、いとらうたげなり(とても可愛らしいのです)。いたく面痩せて(とても面痩せして)、もの思ひ屈したまへる(物思いに沈んでいらっしゃるのが)、いとどあてにをかし(ますます上品で趣き深い)。

[第三段　源氏、女三の宮を諭す]

「*いと幼き御心ばへを見おきたまひて(とても未熟なあなたの御考えを朱雀院は御承知置かれて)、いたくはうしろめたがりきこえたまふなりけりと(大変に御心配申し為されていらっしゃるものと)、思ひあはせたてまつれば(この手紙を拝見申し上げますので)、*今より後もよろづになむ(今までも是からも何かと煩く、)。かうまでもいかで聞こえじと思へど(このようには如何して申し上げられようかと思いますが)、上の(院の上が)、*御心に背くと聞こし召すらむことの(私を御不満に思っていらっしゃるようなのが)、やすからず(心落ち着かず)、いぶせきを(納得も出来ないので)、ここにだに聞こえ知らせでやは*とてなむ(今回だけはあなたに申し聞かせなくてはならないかと、思うのです)。　*「いと幼き御心ばへを」については、注に＜以下「罪いと恐ろしからむ」まで、源氏の詞。この冒頭の「幼し」「うしろめたがる」などの発言は女三の宮の幼さを面と向かってののしっているにも等しいきつい表現。＞とある。従って、「幼し」を＜未熟＞と言い換えて置く。　*「今より後も」の「より」は、「後も」の「も」を強調ではなく列挙の係助詞と見れば、経過点を示す格助詞と取れるので「今より」は＜今までも＞で、「後も」は＜この後も＞だ。「今より後は」なら現代語と同じで＜今から後は＝今後は＞という範囲限定で、「後も」はその強調に見えなくもないが、下に「ここにだに聞こえ知らせでやは」とあり、この「ここにだに」を訳文では＜あなたにだけ＞と聞き手の姫宮を対象体と取っているようだが、私は「ここにだに」は＜此処でだけ＝今だけ＞と言っているように思うし、そう取らなければ全体の文意がつかめないと思うので、「今より後も」は＜今までもこの後も＞と読んで置く。なお、「よろづになむ」は＜言いさした形。下に、心配でならない、また同様な過ちを犯すかもしれないのが気がかりだ、という意をこめる、余意・含みのある表現。＞と注にあるが、同意出来ない。仮に、「よろづになむ」の下に＜いとどいとほしきに＞などが省かれているとしても、既に院や殿の懸念は「うしろめたがりきこえたまふ」や「思ひあはせたてまつれば」と述べられていて、それを受けた展開が「よろづいとほし」では間が抜けた、というか、幾分空回りを演じた冗句になってしまい、此処が冗談を言う場面では無いと認識して置きたい。「思ひあはせたてまつれば」という条件提示を受ける展開表示は「ここにだに聞こえ知らせでやはとてなむ」に違いない、と私は読む。即ち、「よろづになむ」は「かうまでもいかで聞こえじ」を補説修辞しているのであって、此処に句点は付かない。　*「御心に背く」の「みこころ」は朱雀院の御判断、「そむく」の主語は殿で、発言としては＜私が院のお気に障る＞。　*「とてなむ」は下に＜思ひはべる＞くらいが省かれている、のだろう。

*いたり少なく(思慮が足りなく)、*ただ、人の聞こえなす方にのみ寄るべかめる御心には(ただ誰かがお勧め申すままに頼りがちなあなたの御考えには)、*ただおろかに浅きとのみ思し(私の言動がただ稀に訪ねて薄情だとばかりお見えになって)、*また、今はこよなくさだ過ぎにたるありさまも(また今ではだいぶ年を取った風体も)、あなづらはしく目馴れてのみ見なしたまふらむも(老いぼれて見苦しいばかりにお思いのようなのも)、*かたがたに口惜しくもうれたくもおぼゆるを(その所為でこういう目に遭うのかと悔しくも忌々しくも思えますが)、院のおはしまさむほどは(院の上が御存命中は)、なほ*心収めて(やはり何ごとも穏便に)、*かの思しおきてたるやうありけむ(院が良かれとお決めになった私との婚姻関係を守って)、さだ過ぎ人をも(こんな老人の夫でも)、*同じくなずらへきこえて(色男に並び申させて)、いたくな軽めたまひそ(あま

り邪険に為さいますな)。　*「いたり少なく」は注に＜女三の宮には思慮分別がないと、面と向かっていう。罵倒するに等しい発言。＞とある。「いたり少なし」に定句語用があったとしても、確かにキツイ語感だ。　*「ただ人の」は「ただうどの(臣下の者の)」ではなく「ただひとの(単に誰かの)」と読むようだ。　*「ただおろかに浅し」は殿の形容で、「思す」のは姫宮。　*「また今は～」は注に＜源氏の老齢をさしていう。『集成』は「以下、自分の薄情を怨んで、若い柏木と通じたと、暗に怨んで言う」。『完訳』は「自らを老醜と自嘲し、以下に、柏木と通じた宮を暗に非難」と注す。＞とある。が、私はこの源氏殿の言葉を「宮を暗に非難」しているものではなく、卑下や厭味も含まれているかも知れないが、現に起こった密通と懐妊という事実を前にして、殿自身がどのように自分を納得させようとしているかを、暗にでは無くはっきりと明示した特異な発言、と読んでみたい。　*「かたがた」は注に＜「ただ愚かに浅き」と「こよなくさだ過ぎたる」とをさしていう。＞とある。それはそうだろうとは思うが、それだけなら此処でわざわざ「かたがたに」と言改めて言う必要は無い、のではないか。私はこの殿の発言の文意を暗示ではなく明示と読んでいるので、この「かたがたに」は明らかな複意語用に見える。つまり、殿が「おろかに浅し」く「さだ過ぎにたる」という「かたがた」の事情があったので、宮と衛門督という「かたがた」が、密通と懐妊という「かたがた」の不始末を仕出かした、とはっきり言っているのだ。殿が藤君の手紙を読んだ事は、宮は自分の不注意だったのだから痛いほど承知している。その二人の間に交わされた言葉として、この「かたがた」がそういう意味を明示していた、と取るのは会話文の普通の読み方だ。生きている現場の言葉に於いては、具体記号が必ずしも具体事象を意味しないし、抽象記号が必ずしも抽象事象を意味しない。支配力は現場の空気感、臨場者の認識性にある。　*「心収めて」の「心」は殿や宮の＜気持＞ではなく＜物事の本質＞ないし＜大事と思える事柄＞を言う一般名詞、かと思う。で、「心収めて」は＜体面を取り繕って→事を穏便に＞という定句、と読んで置く。　*「かの思しおきてたる」は「院のおはしまさむほどは」という条件を受けた話題対象表示なので、「かの」は当然に「院の」を意味する。で、「やうありけむ」は客観具象が隠された連体名詞だが、院が望ましくお決めになったであろうこと、と言えば、殿と宮との結婚なのだろう。で、それを「心収めて」と言うのだから、この婚姻関係を守って、という文意なのだろう。つまり、殿は決して認めたり許したり納得したりなどしていないが、事実として裏切られたフラれた男なのであり、それを自覚しようとしているワケだ。その上で、院の手前、それに帝の手前も世間体も当然にあるだろうが、形としての夫婦関係は保持する心算だ、と宮に言明しているのだ。是は明示であり、だから宮もその心算で良好な夫婦関係を演じるように、と命じているワケでもある。幼い宮が受け止め切れるとは思えないほどの、断絶宣言にも聞こえる。しかし、宮は当事者だし、身ごもってもいるのだから、腹を括らなければならないだろう。　*「同じくなずらへきこえて」の主語は殿で＜私を同列に並び申させて＞だが、比較対照対象は色男たる＜藤君＞なのだろう。

いにしへより本意深き道にも(私は昔から願ってきた出家についても)、*たどり薄かるべき女方にだに(仏道に造詣の薄そうな女の方にさえ)、皆思ひ後れつつ(次々と遅れをとって)、いとぬるきこと多かるを(とても思いに満たない所が多いのですが)、*みづからの心には(私の気持としては)、何ばかり*思しまよふべきにはあらねど(院の上が何もお思い残しがあるわけでは無いものの)、今はと捨てたまひけむ世の後見に譲りおきたまへる御心ばへの(遂にと思い立って出家なさり後に残したあなたのお世話を私にお任せなさった御考えが)、あはれにうれしかりしを(感じ入って嬉しかったので)、ひき続き争ひきこゆるやうにて(私までが引き続いて競い申すように)、同じさまに*見捨てたてまつらむことの(同じように出家してあなたのお世話を申し上げない事を)、*あへなく思されむにつつみてなむ(院が失望なさるかと自重したのです)。　*「たどり薄かるべき女方にだに」について、注には＜光源氏の女性蔑視の思想は当時の社会一般の風潮か。＞とある。が、是は「女性蔑視」なのだろうか。仏教は先進学問であり、学問は一般に公知であり、公知を修めるのは専ら男の役割だった、という社会事情ではないのか。そも生物上で、男と女の役割は違うが、その物理特性は社会的な役割を振り分ける、

と考える方が自然な考え方だ。特に電化生活以前に於いては、社会的にも個人的にも実際の生活上で、その生理的物理的差異は顕著に認識される場面が多かったことだろう。その後の社会変化で、次第に男女差異の認識は微妙になって来ているが、役割上の立場の違いを優劣感情にばかり認識するのは、組織構成上の地位としてはその上下要素は厳然とあるとは思うが、役割分担の各自管理領域も現実にあるのだから、生活心理として不健康な印象だ。　*「みづからの心には」は源氏殿の気持で、「あはれにうれしかりしを」に繋がる文で、「何ばかり～御心ばへの」までが対象表示、なのだろう。しかし、込み入っていて分かり難い。　*「思しまよふべき～御心ばへ」の主語は朱雀院。　*「見捨てたてまつらむ」は＜殿が出家して宮をお見捨て申し上げる＞。　*「あへなく思されむ」は＜主語は朱雀院。＞と注にある。

心苦しと思ひし*人びとも（後に残すのは気懸かりだと思っていた面倒を見ていた若い人たちも）、今はかけとどめらるるほだしばかりなるもはべらず（今では落ち着いて、私の出家を思い留めさせる足かせになることもありません）。女御も、かくて（女御も安泰で）、行く末は知りがたけれど（先の事は分かりませんが）、御子たち数添ひたまふめれば（御子たちも数が増えて行きなさるようなので）、みづからの世だにのどけくはと見おきつべし（私の生きているうちは安心だと思っています）。その他は（その他の御方々は）、誰れも誰れも、あらむに従ひて（各自が意に沿った暮らしぶりで）、もろともに身を捨てむも（私と共に出家するのも）、惜しかるまじき齢どもになりにたるを（惜しく無いほどの歳になっているのを）、やうやう*すずしく思ひはべる（幾らかは責任が果たせたかと、やっと気が楽に思えています）。　*「人びと」が誰を指すのか分かり難いが、下に「その他は～齢どもになりにたる」とあって、それが六条院や二条院の御方々だとすれば、この「人びと」は撫子や源君のような若い世代の人たちのこと、のように見える。　*「すずし」は＜気が楽だ＞と古語辞典にある。

院の御世の残り久しくもおはせじ（院の御余命も長くはいらっしゃらないでしょう）。いと篤しくいとどなりまさりたまひて（大分お苦しみがますます進みなさって）、もの心細げにのみ思したるに（心細くお思いのところに）、今さらに思はずなる御名の漏り聞こえて（今更に不祥事の汚名をお耳に入れ申して）、御心乱りたまふな（御心を悩ませなさいますな）。

*この世はいとやすし（現世に過ちは付き物だ）。ことにもあらず（それ自体が問題なのではなく、その対処が肝要だ）。後の世の*御道の妨げならむも（院の御成仏の妨げになることこそ）、罪いと恐ろしからむ（罪深いのだ）」　*注ではこの文意に＜『集成』は「この現世については、何の気にかけることもありません。どうということもないのです」「現世だけのことなら、問題はない、の意」。『完訳』は「この世は、じっさいどうというものでもない、別段のこともないのです」と訳す。世間虚仮、この世は仮の世であるとする現世観。＞と説明がある。「世間虚仮」は大辞泉に「世間虚仮（せけんこけ）唯仏是真（ゆいぶつぜしん）」の項目で＜この世にある物事はすべて仮の物であり、仏の教えのみが真実であるということ。天寿国曼荼羅（てんじゅこくまんだら）に記されており、聖徳太子の言葉という。＞とある。難文だ。近頃良く聞く言い方でこれに近い気がするのは＜失敗が問題なんじゃない、如何乗り越えるかが大事だ。＞という言い方だろうか。　*「おんみち」の「御」は院に対する敬語なのだろう。

など（などと殿は）、*まほにそのこととは明かしたまはねど（正面から密通の裏切りに傷付けられた自身を取り上げて責めなさることは無いが）、つくづくと聞こえ続けたまふに（じっくりとそれが院に対して罪深いという意味を説き続けなさるので）、涙のみ落ちつつ（宮は涙を落としながら）、我にもあらず思ひしみておはすれば（茫然自失に自責の念に駆られていらっしゃって）、我

もうち泣きたまひて(殿も情けなく思わずお泣きになり)、　*「まほにそのこととは明かしたまはねど」は注に＜『完訳』は「密通事件。しかしそれを暗に語り、宮を責めていることになる」と注す。＞とある。が、同意出来ない。上文に「この世はいとやすし。ことにもあらず。後の世の御道の妨げならむも、罪いと恐ろしからむ」とあったばかりではないか。密通と懐妊については、殿ははっきりと話題に上げているのだ。その上で、その裏切行為自体を責めるのではなく、とは言え、殿はその裏切りに当然に傷付いてはいるが、それをぐっと堪えて、今後の対処が大事だ、と宮を諭しているのだろう。「明かす」は＜打ち明ける＞という場合もあるが、此処では＜物事を明らかにする→説明する→諭す＞の意味で、「まほにそのこととは」は＜その事自体を真に受けて問題だとは＞ということで、「まほにそのこととは明かしたまはねど」が＜それ自体が問題だとは説明なさらないが＞という言い方になっている。是は殿の大人の対応のようでもあるが、自分の傷口が拡がるのを恐れた一種の＜保身＞でもあり、院に対する罪深さを持ち出して宮に体面保持の意味を諭すという＜小賢しさ＞は、殿本人が下文で言うように醜悪だが、不祥事自体が醜悪であってみれば、これ以外の現実的な対処法が無かった、ようにも見える。

「人の上にても(他人事だとしても)、もどかしく聞き思ひし古人のさかしらよ(まどろっこしいと聞き思っていた老人の理屈好きだが)。身に代はることにこそ(それを私が演じることになるとは)。いかにうたての翁やと(何て煩い爺だと)、むつかしくうるさき御心添ふらむ(あなたは面倒で厭にお思いなのでしょうね)」

と、恥ぢたまひつつ(と恥じ入りなさりつつ)、御硯引き寄せたまひて(御硯を引き寄せなさって)、手づから押し磨り(殿自ら墨を磨って)、紙取りまかなひ(紙を用意して)、書かせたてまつりたまへど(お返事を書かせ申しなさるが)、御手もわななきて(宮は御手も震えて)、え書きたまはず(とてもお書きになれません)。

「かのこまかなりし返事は(あの濃厚な衛門督の手紙への返事は)、いとかくしもつつまず通はしたまふらむかし(こんなに気後れすること無く交わしなさるのだろう)」と思しやるに(と考えて御覧になると)、いと憎ければ(とても憎らしいので)、よろづのあはれも冷めぬべけれど(殿は宮への一切の愛情も冷めてしまいそうだが)、言葉など教へて書かせたてまつりたまふ(文面を教えて宮に院へのお返事を書かせ申しなさいます)。

[第四段　朱雀院の御賀、十二月に延引]

*参りたまはむことは(殿が姫宮の父院五十賀を後見申しなさることは)、この月かくて過ぎぬ(この十月はこうした事情で流れたのです)。　*「参りたまはむ」の主語は源氏殿、らしい。此処の文は源氏殿の目線での語りのようだ。ただ、この「まゐり」である朱雀院五十賀は一段での注釈にあった＜『集成』は、女三の宮主催の御賀という。源氏主催といっても、女三の宮の夫としての主催である。＞という意味合いを強く感じさせる。というのは、「かくて過ぎぬ」の「かくて」が＜宮の事情によって＞という意味だからだ。一段には「十月にと思しまうくるを、姫宮いたく悩みたまへば、また延びぬ」とあった。「いたく悩みたまへば」は、妊娠による変調もあったろうし、身重自体が大儀になって来たこともあっただろうが、宮は悪阻に苦しんだ、というよりは、密通による懐妊の罪深さに心労した、という事情だったらしく、殿は宮に、過ちは許せないが、それでも朱雀院には健やかな姿をお見せ申すように努めなさい、と‘励ました’というのが三段の内容だった、と思う。

「二の宮の御勢ひ殊にて参りたまひけるを(二の宮が藤原殿の御後見で格別盛大に朱雀院五十賀をなさったので)、*古めかしき御身ざまにて(あなたがそんな老人のような醜めっ面で)、立ち並び顔ならむも(同じ月にお祝い申しなさるのも)、憚りある心地しけり(不都合に思えます)。 *「ふるめかし」は＜老人くさい。＞と大辞泉にある。下に「このいたく面痩せたまへる、つくろひたまへ」とあるので、「古めかしき御身ざま」は＜宮の老人くさい苦渋の表情＞という言い方なのだろう。

*霜月はみづからの忌月なり(十一月は私の謹慎月です、ので行なえません)。 *「しもつき」については、注に＜桐壺院の崩御の月。「賢木」巻に語られている。＞とある。ただ、そうであるなら、むしろ筋としては朱雀院の御忌月と言うべきだ。源氏殿の自負や意地を示した物言いかも知れないが、客観的事実として、また厳然たる政治力学情勢からして、帝位を継いだのは兄院だ。

年の終りはた、いともの騒がし(年末はまた何かと慌しい)。また(それに)、いとどこの御姿も見苦しく(あなたの腹太もますます進んで見苦しく)、待ち見たまはむをと思ひはべれど(院が折角あなたとの御体面を待ち望んでいらっしゃるものをとは思いますが)、さりとて(かと言って)、さのみ延ぶべきことにやは(不都合があるからとばかり言ってお祝いをこれ以上は延期できませんから)。むつかしくもの思し乱れず(どうせ成るようにしか成らないのですから、難しく思い悩まずに)、あきらかにもてなしたまひて(朗らかに振舞って)、このいたく面痩せたまへる(その酷くやつれた御顔を)、つくろひたまへ(直しなさい)」

など(などと殿は)、いとらうたしと(とても可愛らしいと)、*さすがに見たてまつりたまふ(それでも宮を思い申しなさいます)。 *「さすがに」については、注に＜源氏は女三の宮に対して、嫉妬と憎悪の気持ちもあるが一方で憐愍の情もないではない、という意。＞とある。殿がどれくらい素直な情感として、宮を愛しく思ったのか、私には分からないが、相当に複雑な心境であったことは確からしい。

衛門督をば(殿は衛門督を)、何ざまのことにも(どんな場合でも)、ゆゑあるべきをりふしには(式典の際には)、かならずことさらにまつはしたまひつつ(必ず格別に重用なさって)、のたまはせ合はせしを(式次第をご相談なさったものだが)、絶えてさる御消息もなし(以来一切お呼び出しのご連絡はありません)。

人あやしと思ふらむと思せど(殿は周囲の者が変に思うかと懸念なさったが)、「見むにつけても(面対すれば)、いとど*ほれぼれしきかた恥づかしく(改めて自分の間抜けさが思い知らされて)、見むにはまたわが心もただならずや(とても平常心で居られそうもない)」と思し返されつつ(と逡巡なさって)、やがて月ごろ参りたまはぬをも咎めなし(そのまま藤君が何ヶ月も殿の許へ参上なさらないことにも不問に付します)。 *「ほれぼれし」は＜ぼけている、ぼんやりしている＞と古語辞典にある。

おほかたの人は(ほとんどの人には)、なほ例ならず悩みわたりて(衛門督がずっと不調で苦しみ続けて)、院にはた(源氏殿の方も)、御遊びなどなき年なれば(音楽会などの催しが無い年だったので、行き来が無いのだろう)、とのみ思ひわたるを(とばかりに知られていたが)、大将の君ぞ(大将の源君は)、「あるやうあることなるべし(衛門督が寄り付かないのは、何か理由があるに違いない)。*好色者は(衛門督が色気づいて)、*さだめてわがけしきとりしことには(もしそれ

が、私が気付いた六年前の蹴鞠の日に姫宮のお姿が垣間見えなさったことに藤君が心を奪われたらしいこと、だったとしたら)、忍ばぬにやありけむ(それを我慢できずに不義に及んだのかも知れない)」と思ひ寄れど(と思い付いたが)、いとかく定かに残りなきさまならむとは(これほど全てが殿に知り尽くなされている事態になっていようとは)、思ひ寄りたまはざりけり(考えも付きなさいませんでした)。　*「好色者」は「すきもの」と読みがある。「すきもの」は＜好色者、遊び人、風流人＞で、藤君は堅物ではないだろうが、特に好色だとはされていないし、それなりに教養ある「風流人」なのだろうが、ここでの話題は不義密通だから、やはりこの「すきもの」は＜好色＞の意に取るべきかと思われ、注意すべきは「すきものは」の「は」という係助詞の読み方に見える。現代語の「は」は主題提示の語用が多いが、古語の「は」は限定条件提示を意味する事が多いらしく、この「は」は＜～の場合には＞という言い方だとすれば、この「すきものは」の文意は＜藤君が好き者の場合には＝藤君が色気づいたら＞になる。　*「さだめて」は＜きっと。必ず。＞と古語辞典にある。が、この「さだめて～しことには」という仮定文語用では＜もしそれが～に違いないとしたら＞という言い方、と読んで置く。「我が気色取りし」は＜「わが」は夕霧をいう。自分（夕霧）が気づいたこと、六年前の蹴鞠の日のこと。＞と注にある。こういう文は、当時の読者が現代語文として流し読みして興味を駆り立てるには丁度良い語り口なのかも知れないが、改めて意味を整理しようとすると、とても面倒だ。

[第五段　源氏、柏木を六条院に召す]

十二月になりにけり(十二月になりました)。*十余日と定めて(御賀のための試楽の日を十日過ぎと決めて)、舞ども習らし(演舞を練習し)、殿のうちゆすりてののしる(六条院を挙げて準備に騒がしい)。二条の院の上は(紫の上は)、まだ渡りたまはざりけるを(それまで二条院から六条院に戻っていらっしゃらなかったが)、この試楽によりてぞ(この試楽があったので)、えしづめ果てで渡りたまへる(伏せってばかりもいられずにお戻りなさいました)。　*「じふよにち」は御賀の日なのか、試楽の日なのか。下に「この試楽によりてぞ」とあるから、試楽の日と思って置く。御賀の日取りなら、「定めて」ではなく＜定め奉りて＞になるかも知れない。全く省語は分かり難い。

女御の君も里におはします(女御の君も子連れでで六条院に里帰りしていらっしゃいました)。*このたびの御子は、また男にてなむおはしましける(今度の御子もまた男の子でいらっしゃいました)。すぎすぎいとをかしげにておはするを(御子たちが次々ととても可愛らしくいらっしゃるので)、明け暮れもて遊びたてまつりたまふになむ(紫の上は一日中遊び相手をお勤め申しなさって)、過ぐる齢のしるし(長生きした御蔭と)、*うれしく思されける(嬉しく思われなさいます)。*「このたびの御子」については、注に＜『集成』は「前に見えた「三の宮」に次ぐ方である」。『完訳』は「女楽のころ懐妊五か月。第三皇子（後の匂宮）か、その兄の二の宮か」。『新大系』は「「二の宮」の次の皇子」と注す。＞とある。まだ私にはこの注の意味するところが分からない。後から活躍する登場人物たちのようだ。　*「うれしく思されける」は＜主語は紫の上。大病を克服して生き延び、孫を見ることができた喜び。＞と注にある。

試楽に(しがくに)、右大臣殿の北の方も渡りたまへり(うだいじんどののきたのかたもわたりたまへり、右大臣殿の奥方である養女の撫子もお見えになりました)。

大将の君、丑寅の町にて(源君が夏の町で)、まづうちうちに*調楽のやうに(予め内々に公務の予行演舞まがいに近衛の舎人を率いて)、明け暮れ遊び習らしたまひければ(連日演奏共に練習な

さっていたので)、かの御方は(御方である花散里は)、御前の物は見たまはず(春の町での試楽は御覧になりません)。　*「調楽(てうがく)」は公式行事での予行演舞、らしい。

衛門督を、かかることの折も交じらはせざらむは、いと栄なく(衛門督をこのような場合にも出席させないのはとても寂しく)、さうざうしかるべきうちに(物足りなく感じられて)、人あやしと傾きぬべきことなれば(皆が何か訳が有りそうだと怪しみかねないので)、参りたまふべきよしありけるを(参りなさるよう殿からお誘いが有ったのを)、重くわづらふよし申して参らず(衛門督は重病と申して参ろうとしません)。

さるは(しかし)、そこはかと苦しげなる病にもあらざなるを(何処が如何とはっきり苦しんでいる病でもなさそうで)、思ふ心のあるにやと(やましい気持から出そびれているのかと)、*心苦しく思して(殿は穏便な関係を繕うのに不都合にお思いなさって)、取り分きて御消息つかはす(特に重ねてお誘いのお知らせを遣わしなさいます)。　*「心苦しく思して」は注に＜源氏の、柏木への憐愍の情。＞とある。「れんびんのじょう」は＜あわれみ＞だろうが、此処で語られているのは、事を丸く収めようとする殿の打算、なのだろう。

父大臣も(ちちおとども、父の致仕太政大臣である藤原殿も)、

「などか返さひ申されける(どうして辞退申すのか)。ひがひがしきやうに(十月の御賀には参列したのだから、今回の固辞は偏屈に)、*院にも聞こし召さむを(朱雀院もお聞きあそばすだろうに)、おどろおどろしき病にもあらず(大病でも無いのだから)、助けて参りたまへ(手当てして参上しなさい)」　*「院」は源氏殿か朱雀院か。是を藤原殿が、六条院と衛門督との両者の言い分の、どちらに分が有るかを客観的に判じた物言い、と読めば、六条院源氏殿のことのようにも見える。が、「聞こし召さむ」とまでの敬語遣いは朱雀院に対するものに思え、御賀は朱雀院の祝賀だし、二の宮主催で藤原殿後援の御賀には藤君は夫としても参列しているので、衛門督の公職位からして三の宮主催で源氏殿後援の御賀に出席しないのは変、と藤原殿も思った、ようにも見える。一応、此処は朱雀院と見て置く。

とそそのかしたまふに(とお勧めなさっているところに)、かく重ねてのたまへれば(殿のお誘いが重ねて有ったので)、苦しと思ふ思ふ*参りぬ(気まずく思いながら藤君は六条院に出向きました)。　*「参りぬ」は注に＜尊敬語なしの直接的表現。不気味な事件の展開を暗示。＞とある。が、「直接的表現」というより、場面展開の動きの早さを表わす事象状況の報告風な書き方なのではないか。だから、風雲急を告げるかのような切迫感があって、それは「不気味な事件の展開を暗示」しているのかもしれない。ただ、不穏な要素は元々あるので、「不気味な暗示」というよりは＜展開への興味を駆り立てる臨場感のある表現＞かと思う。

[第六段　源氏、柏木と対面す]

まだ上達部なども集ひたまはぬほどなりけり(まだ他の高官たちが集まって来ていない時分でした)。例の気近き*御簾の内に入れたまひて(いつものように殿は衛門督をお側近くの御簾内の廂の間に招き入れなさって)、母屋の御簾下ろしておはします(ご自分は母屋でさらに御簾を下して座していらっしゃいます)。　*「御簾」については、注に＜前者の「御簾」は簀子と廂の間とを仕切る御簾、後者の「御簾」は廂の間と母屋を仕切る御簾である。柏木は廂の間、源氏は母屋の御簾の中にいる。光の関係で、柏木の表情は源氏から見えるが、母屋の中の源氏の表情は柏木から見えない。＞とある。

げに(確かに衛門督は)、いといたく痩せ痩せに青みて(とてもひどく痩せて青白く)、例も(普段でも)、誇りかにはなやぎたる方は(藤原氏らしい威厳ある派手な振る舞いは)、弟の君たちにはもて消たれて(弟君たちより目立たず)、いと用意あり顔にしづめたるさまぞことなるを(とても物知り顔に落ち着いている態度が印象的なのだが)、いとどしづめてさぶらひたまふさま(それが一層静かに控えていらっしゃる姿は)、「などかは皇女たちの御かたはらにさし並べたらむに(どうして内親王の夫として並ぶのに)、さらに咎あるまじきを(何の差し障りがあろうかというほど立派だが)、ただことのさまの(ただ今回の姫宮との密通の)、誰も誰もいと思ひやりなきこそ(どちらも考えの浅い点については)、いと罪許しがたけれ(全く罪を許されるものではない)」など(などと殿は)、御目とまれど(衛門督を観察なさるが)、さりげなく(それはさて置き)、いとなつかしく(とても親しげに)、

「そのこととなくて(特に機会もなくて)、対面もいと久しくなりにけり(会うのも久しぶりですね)。月ごろは(この数ヶ月は)、*いろいろの病者を見あつかひ(いろいろな症状のある病人を看病して)、心の暇なきほどに(気持ちの余裕が無かったので)、院の御賀のため(朱雀院の五十賀のために)、ここにものしたまふ皇女の(ここにいらっしゃる女三の宮が)、*法事仕うまつりたまふべくありしを(入道の院に仏式の祝賀を挙げて差し上げなさろうというご意向があるのに)、次々とどこほることしげくて(次々と差し障りが多くて、今に至るまで延期しておりますが)、かく年もせめつれば(このように年も押し迫ったので)、え思ひのごとくしあへで(十分では無いにしても)、型のごとくなむ(形だけでも)、*斎の御鉢参るべきを(精進御宴席を設け申し上げなければと、存じましてその御相談を申し上げたくお呼び立て申しました。)、　*「いろいろ」はいろんな病状のことなのだろう。「病者(びゃうじゃ)」は紫の上と姫宮のふたりで「いろいろ」ではない。　*「ほふじ」については、注に＜出家者である朱雀院の五十賀が仏事で催されるので「法事」という。＞とある。　*「斎の御鉢」は「いもひのみはち」と読みがあり、「いもひ」が＜精進料理＞と大辞泉にあるので、「斎の御鉢」は＜院の為の精進宴席＞らしい。また、「参るべきを」を＜設け申さなければならないのですが＞と読んで下に接続させても、全体の文意は変わらないように思うが、私は、事情を説明すべき源氏殿が、話者としての息遣いとして、此処で一旦、衛門督を呼び出した背景説明をしたもので、下に＜そのお手伝いを願いたく、あなたに来て頂きました＞くらいが言い差されたもの、と読んで置く。

御賀などいへば(ついては御賀などと言えば)、ことことしきやうなれど(事改まったようですが)、*家に生ひ出づる童べの数多くなりにけるを御覧ぜさせむとて(当家に生まれた子供たちの数が多くなったのを院の帝に御覧にいれようと)、舞など習はしはじめし(その子供たちに舞などを習わせ始めたが)、そのことをだに果たさむとて(それだけでも実現させようということで、)。拍子調へむこと(その歌舞の指導に)、また誰れにかはと思ひめぐらしかねてなむ(あなたの他に誰か居るかと思い巡らしかねたので)、月ごろ訪ぶらひものしたまはぬ*恨みも捨ててける(何ヶ月も顔をお見せなさらない恨みも忘れました)」　*「家に生ひ出づるわらはべ」は客観的には＜桐壷女御がお産みになった親王と内親王たち＞であり、朱雀院の孫だ。が、帝妃は桐壷女御一人では無いので、今上帝の御子、とは朱雀院の孫だが、は他にも居る。退位して出家したとは言え、朱雀院に桐壷女御腹の御子たちを会わせるのは、その存在主張になることは確かだ。その現実的意味を当時の読者は、この言い方に実感したのかも知れない。　*「恨みも捨ててける」は普通なら軽口めいた言い回しなのだろうし、周囲の者はそう聞いたのだろうが、是を殿がどのくらいの意味合いで言ったのか、藤君がどれくらいの意味合いで聞いたのか、と読者の気を引く書き方だ。

とのたまふ御けしきの(と仰る殿の御態度は)、うらなきやうなるものから(腹蔵が無いように思えるものの)、いといと恥づかしきに(衛門督はそれはもう気が引けて)、顔の色違ふらむとおぼえて(自分の顔色が変わっているような気がして)、御いらへもとみに聞こえず(お応えも直ぐには申し上げられません)。

[第七段　柏木と御賀について打ち合わせる]

「月ごろ(この数ヶ月)、かたがたに思し悩む御こと(奥様方が御病気でお苦しみの事を)、承り嘆きはべりながら(承って心配申し上げながら)、春のころほひより(春頃から)、例も患ひはべる*乱り脚病といふもの(持病の脚気というものが)、所狭く起こり患ひはべりて(頻繁に起こって具合が悪く)、はかばかしく踏み立つることもはべらず(普通に立ち歩くことも出来ませんで)、月ごろに添へて沈みはべりてなむ(このところますます悪化しまして)、内裏などにも参らず(御所へも出仕出来ずに)、世の中跡絶えたるやうにて籠もりはべる(世間から隔離されたように家に籠もっております)。　*「乱り脚病(みだりきゃくびゃう)」は＜脚気(かっけ)＞と古語辞典にある。「脚気」は＜ビタミンB_1の欠乏により起こる病気。倦怠感(けんたいかん)・手足のしびれ・むくみなどから始まり、末梢神経の麻痺(まひ)や心臓衰弱を呈する。かつて日本で国民病とされた。《季 夏》＞と大辞泉にある。

院の御齢足りたまふ年なり(朱雀院の御歳がお祝いすべきに至りなさる年なので)、人よりさだかに数へたてまつり仕うまつるべきよし(藤原氏は誰よりもはっきりと御歳を数え申し差し上げてお祝いを仕え申さなければならない立場だと)、致仕の大臣思ひ及び*申されしを(父の致仕大臣が思い至って開催申しなされた女二の宮が参上なさった御賀の時には)、　*「申されし」の「し」は過去の助動詞「き」の連体形で＜女二の宮が参上した十月の御賀＞のこと、だろう。何故か、この藤君の弁は過剰なほど「御賀」の語を隠す。臣下は院に「御賀」と言うことさえ不遜なのだろうか。さすがに其れは無い、と思うが。「を」は対象を示す格助詞で、何の対象かと言えば、下に述辞される「参りてはべし」に結ぶので、言い方としては＜～の場合には、～の時には＞になる、かと思う。

『*冠を掛け(冠を置いて)、車を惜しまず捨ててし身にて(公用車待遇を辞した身なので)、進み仕うまつらむに(私はそのお勤めを)、つくところなし(果たせない)。げに(確かに其方は)、*下臈なりとも(地位は低いが)、同じごと深きところはべらむ(同氏一門の立場は深く自覚していることだろう)。その心御覧ぜられよ(その気持ちをお示し申し上げよ)』と(と父が私に)、催し申さるることのはべしかば(催促申しなさることがございましたので)、重き病を*相助けてなむ(悪い体調を何とか補って)、参りてはべし(参列いたしました)。　*「かうぶりをかけ、くるまををしまず」は注に＜明融臨模本、合点あり、『奥入』に「掛冠」と「懸車」の故事を『蒙求』から引用する。以下「御覧ぜられよ」まで、致仕大臣の言葉を引用。＞とある。「蒙求(もうぎゅう)」は＜《「易経」の一句「童蒙我に求む」による》中国、唐代の類書。3巻。李瀚(りかん)撰。「孫康映雪、車胤(しゃいん)聚蛍(しゅうけい)」のように、上代から南北朝までの有名人の逸話で類似の事跡を一対とし、4字句計569句の韻文で、8句ごとに韻を変える幼童用の教科書。日本には平安時代に伝わり、盛んに学ばれた。＞と大辞泉にある。引退や隠居を示す言い方らしい。*「げらう」は＜地位の低い者＞。藤君は衛門督兼中納言で従三位。藤原殿は致仕太政大臣で従一位。雲上世界のことながら、歴然とした身分差がある、らしい。　*「あいたすく」の「あい」は強調または丁寧語にする接頭語、らしい。「助く」は＜手当てする、補う＞。

今は(朱雀院は今では)、いよいよいとかすかなるさまに思し澄まして(いよいよとても静かな生活で瞑想に耽けなさって)、いかめしき御よそひを*待ちうけたてまつりたまはむこと(殿が盛大な御宴を御山に受け入れて頂きなさる事を)、願はしくも思すまじく見たてまつりはべしを(お望みでは無いように拝察仕りますので)、事どもをば削がせたまひて(諸事簡素になさって)、静かなる御物語の深き御願ひ叶はせたまはむなむ(姫宮との静かな親子の語らいの深い御望みを適わせなさろうという殿の御計画は)、まさりてはべるべき(勝れていると存じます)」　*「待ちうけたてまつりたまはむ」の主語は源氏殿だが、「待ちうけたてまつる」は朱雀院に＜迎え入れて頂く＞ということで、宴会場所が山の院になる事情からなる言い方、なのだろう。面倒臭いし、とても分かり難い。

と申したまへば(と衛門督が申しなさると)、いかめしく聞きし御賀の事を(盛大だったと聞いている十月の御賀の事を)、女二の宮の御方ざまには言ひなさぬも(女二の宮に功あるようには言い做さないのを)、*労ありと思す(妻を押し出さずに親を立てる衛門督の配慮と、殿は感心なさいます)。　*「らうあり」は、衛門督の配慮が行き届いている、ということのようだ。が、私にはその判断基準が分からない。この衛門督の弁では、御賀の功で藤原殿を立てていて、女二の宮の功を敢えて伏せているように聞こえる。「御賀」という語を避けたのは、その語が＜女二の宮主催＞という意味になるからだったのかも知れない。親を立てて、妻を、延いてはその夫たる自分を卑下する、というのは儒教精神の親子道徳に適うような気はするし、藤原氏の栄誉を守るのは惣領の使命でもあるとは思うが、身分社会に於いて宮様を立てる事こそが体制保持の絶対価値観ではないのか。名を捨てて実を取ってこそ藤原氏の拠って立つ道ではないのか。反対勢力を肯かせる上手い方便ではないのか。王に神の役を負わせるから天皇なのだろう。などと、私が反論しても本文が変わることは無いので、親子道徳の線で言い換えて置く。

「ただかくなむ(ただ単に、)。こと削ぎたるさまに世人は浅く見るべきを(簡素にしただけのように世間の人は浅く考えがちだが)、さはいへど(さすがに貴公は)、心得てものせらるるに(良く分かっていらっしゃるので)、さればよとなむ(これで良かったのだと)、いとど思ひなられはべる(とても安心できます)。

大将は(息子の大将は)、公方は(おほやけがたは、公務では)、やうやう大人ぶめれど(だんだん一人前になって来たようだが)、かうやうに情けびたる方は(このような宴席方面のことは)、もとより*しまぬにやあらむ(もともと得意では無いのかも知れない)。　*「しまぬ」は「染む(しむ、馴染む・性に合う)」の未然形に打消しの助動詞「ず」が付いたもの、の連体形。

かの院(朱雀院は)、何事も心及びたまはぬことは(何事も精通なさっていらっしゃらないことは)、をさをさなきうちにも(少しも無い中でも)、楽の方のことは御心とどめて(音楽に関してはご造詣が深くて)、いとかしこく知り調へたまへるを(とても詳しくご存知でいらっしゃるので)、さこそ思し捨てたるやうなれ(いくら世俗をお捨てなさったようでも)、静かに聞こしめし澄まさむこと(じっくりと耳を澄ましてお聞きになることを)、今しもなむ心づかひせらるべき(今でも留意して十分に練習して置く事が必要です)。

かの大将ともろともに見入れて(大将と一緒に面倒を見て)、舞の童べの用意、心ばへ、よく加へたまへ(舞をする子供たちの仕上がりを見て、型の意味などを良く教えてやってください)。物の師などいふものは(専門家の先生というものは)、ただわが立てたることこそあれ(ただ自分の

持ち場だけにしか責任が持て無いので)、いと口惜しきものなり(肝心の工夫を愉しむ点では頼り無いですから)」

など、いとなつかしく*のたまひつくるを(などと殿がとても親しく仰りなさるのを)、うれしきものから(衛門督は嬉しく思いながらも)、苦しくつつましくて(気まずく後ろ暗くて)、言少なにて(言葉少なで)、この御前をとく立ちなむと思へば(この場を早く立ち去りたいと思えば)、例のやうにこまやかにもあらで(いつものように話し込まずに)、やうやうすべり出でぬ(やっとの思いで滑り出たのです)。　*「のたまひつくる」の語感がつかめない。「つくる」は単に＜行なう。する。＞という場合や＜わざと見せる。する振りをする。＞という場合があるようで、此処でこういう言い方をする作者の意図が後者にあるとしても、言い方として＜仰る振りをする＞というのはトゲがありすぎる気がする。だから、言い方としては＜仰りなさる＞くらいの口濃さにして、読み方で味わう、という便法に逃げる。

東の御殿にて(ひんがしのおとどにて、夏の町の寝殿で)、大将のつくろひ出だしたまふ楽人、舞人の装束のことなど(大将が揃え出しなさった楽人や舞人の衣装のことなど)、またまた行なひ加へたまふ(衛門督はさらに工夫を加えなさいます)。あるべき限りいみじく尽くしたまへるに(大将が十分に立派にお考えになっていた物に)、いとど詳しき心しらひ添ふも(さらに詳しい知識が加わると言うのも)、げにこの道は(確かにこういう面では)、いと深き人にぞものしたまふめる(衛門督はとても造詣の深い人でいらっしゃったようです)。